

憩

橋にたたずみ、川面をながめることは人間に許された憩いの一つである。橋は川を渡るためのばかりでなく、留まる場としても利用されてきた。時代の変化とともにその雰囲気は失われることもあるが、一方で橋を人々の憩いの場として再生しようとする努力が続けられている。快適な水上の空間、歴史的背景を重視したデザインは橋の魅力を高める。

▼道頓堀の水上広場——相合橋(昭和58年完成)



▼緑のプロムナード——大坂橋(昭和48年完成)



▼歴史の橋整備第一号——堀原橋(昭和59年完成)



▲橋のギャラリー——錦橋(昭和6年完成、昭和60年改装)



▲中之島の景観と調和した——梅枝木橋(昭和60年完成)



▲商店街のポケットパーク——新道橋(昭和61年完成)



▲大阪城の玄関口——京橋(大正13年完成、昭和55年改装)



▲大阪ビジネスパークと大阪城公園を結ぶ——大阪城新橋(昭和58年完成)

▼橋はまつりの舞台(鈴流し神事)——鈴流橋(昭和4年完成、昭和55年改装)



▲橋は新たなドラマをつくる(大阪女子マラソン)——難波橋(大正4年完成、昭和50年改修)



▲豊臣時代の様子を復元した——極楽橋(昭和40年完成)

集う

橋には人々の集いがある。
橋は旅の起終点であり、花見や月見の舞台となり、祭見物の一等棧敷ともなる。
時には遊びが人々をさそつ。
人々が出会い、そして別れ、橋は人々の喜怒哀楽の発露ともなってきた。
現代の橋もまた、人々の営みに豊かな一場を提供する。

▼橋は一等棧敷(御堂筋パレード)——淀屋橋(昭和10年完成)



▼造幣局の桜の通り抜けて賑わう——川崎橋(昭和53年完成)



▲橋は人々の出会い・別れを見守る——戎橋(平成19年完成)